



我孫子通信

文人の郷だより

令和6年度春号

辻説法

館長のつぶやき



第16回 志賀直哉と「ようかん」

▶「花は桜木、人は武士」という言葉がある。華のように咲いて潔く散る、というのは日本人の心理に合致するものなのだろう。多分に漏れず私も桜が好きだ。誰もいない早朝、皇居沿いの堀端の堤にすくと立つ桜を眺める時、本当に身震いがする。梶井基次郎でなくても、「桜の樹の下には屍体が埋まっている」のではないか、と思えるのだ。

▶また、「花より団子」という言葉もある。私の場合は甘味なら羊羹だな、と思うのだが、今回は志賀直哉と「ようかん」を巡る雑文を記したい。

▶『暗夜行路』の京都を描いた箇所（後篇第三11）に、主人公の時任謙作が「竜岡へ送る^たために駿河屋という店に羊羹を買いに行き」という記述がある。「駿河屋」について調べてみると、京都の和菓子屋であった。

▶羊羹の歴史を紐解いていくと、中国発祥である。文字通り「羊の肉」の「羹^{あつもの}」つまり肉のスープであった。鎌倉時代から室町時代に中国に留学した禅僧が茶や饅頭と

ともに日本に羹をもたらしたとされ、肉食を禁じられていたため、肉が豆や小豆に置き替えられ、精進料理に取り入れられた。次第に汁物から蒸し物に形が変わり、南蛮貿易によって砂糖がもたらされ、戦国時代に茶の湯が広まるようになると、菓子「蒸しようかん」に発展する。そのうち様々な型に流し入れるようになり、蒸さずに型に入れるために寒天を入れた「水ようかん」が1700年代半ば（宝暦の頃）に現れる。さらに水ようかんを火にかけて固めて煉ることによって日持ちを良くした、「煉りようかん」が誕生したのだという



上下写真ともに千鳥ヶ淵の桜（2023年撮影）

(虎屋文庫2019『ようかん』より)。煉りようかんの発祥は江戸、京都など諸説あるが、そのうちの一つが京都の駿河屋であった。

Date

▶総本家駿河屋のHPによると、同店の先祖は豊臣秀吉の茶会にようかんを仕出し、徳川頼宣に従って駿河から紀州に移った。のれん分けや経営母体の変更などもあって、店の経過をたどることは容易ではなさそうだが、京都にも店を構えていた。大正12(1923)年に我孫子を去って京都に移った志賀直哉だが、駿河屋のシーンが出てくる『暗夜行路』後篇第三は我孫子時代に執筆されているようだ。志賀は移住前にもたびたび京都を訪れ(武者小路実篤夫妻の立会いのもとで結婚したのも京都である)、その際の記憶が小説に反映されたのだろうか?これによってリアルさを追加し、京都らしい雰囲気醸し出すことにつながっているのだとすると、さすが志賀先生。志賀も武者小路も甘党で知られるから、気が付いた読者はニヤリとしたのではないだろうか。

▶ようかん好き、として有名な作家としては夏目漱石がいる。『草枕』で「余は凡ての菓子の中で尤も羊羹が好だ。(中略)あの肌合が滑らかに、緻密に、しかも半透明に光線を受ける具合は、どう見ても一個の美術品だ。」と語らせている。谷崎潤一郎は『陰翳礼讃』で「人はあの冷たく滑かなものを口中にふくむ時、あたかも室内の暗黒が一箇の甘い塊になって舌の先で融けるのを感じ、ほんとうはそう旨くない羊羹でも、味に異様な深みが添わるように思う。」とある。また田山花袋も親友 国木田独歩と日光に旅に出た際に名物のようかんをたくさん買い求めている。

▶今回調べていたら冒頭で触れた梶井基次郎も駿河屋のようかんを愛顧していたらしいことがわかった。第三高等学校(京都)にいたわけだから、さもありなんといいところか。文豪は「ようかん大好き」なのだ。今度企画でもしてみようか? I学芸員?

▶春は、さよなら、の季節。散りゆく桜を眺めながら、種田山頭火の愛したといわれる^{ほうふ}防府の「志ほみ羹」でも肴に冷酒でもあおってみようか。

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角(=辻)で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感(編集後記)

●今回のお題は「桜」です●本当は「佐倉」でも可としましたが、寄稿はありませんでした。楚人冠など、吟行に行っているのではと思ったのですが●白樺派の方々は甘党であったようで、我孫子に住んでいるときも甘いものは欠かせなかったようです。駅前のお菓子屋で調達していたようです●どら焼きで有名な時屋さんの掛け紙はいまも武者小路実篤が描いたものです。どれだけ、甘いものが好きだったのか簡単に想像がつかますね(K)

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺

桜と聞いた時、志賀直哉が浮かんだ。一九三二（昭和六）年四月、『大阪朝日新聞』に発表した「奈良の桜」である。一部引用してみる。

「奈良の桜は旅で来て何かしら印象を受け、住んでみて却つて何の印象もなくなつた。奈良の人は花見に郡山まで行く。さもなければ聯隊の営庭へ出かける。」

生まれも育ちも下総大和根人には「郡山」と聞くとどうしても常磐、福島を思い浮かべてしまうが、大和郡山のことを言っているのだらう。「聯隊」はおそらく現在の奈良教育大学のキャンパスにあった歩兵第三八連隊のことを指していると思われる。一九二九（昭和四）年四月から一九三八（昭和一三）年まで奈良市上高畑の現存する志賀邸に住んでいる。

志賀は、奈良で自慢するなら、杉、馬酔木、櫟、楓、竹柏、そして藤と綴っている。次のように続く。

「藤の太木は一番誇つてもいいものかも知れない。それから芝生、こんないい自然の芝生も珍しい。美しいものは花と思ふのは簡単だ。秋、吉野へ行き、桜の紅葉を大変美しく思つた。桜の木の姿も面白くないし、花も面白くない。」

相変わらず志賀らしい表現で安心する。桜と聞くと今は桜肉、熊本が思い浮かぶ。先日佐賀行では熊本へも訪れた。目的は二つ。くまもと文学・歴史館、そして西南戦争の激戦地、田原坂である。熊本は夏目漱石、小泉八雲、そして嘉納治五郎、村川堅固もゆかりの地である。あまり時間がなかったため再訪する予定である。今回のメインは田原坂だった。山田家コレクションは山田家が元々薩摩藩士の出であり、大久保利通ともつながる血筋の関係から西郷隆盛、大久保利通関係の資料も含まれている。近代史研究者の端くれとして訪れたい場所であった。ちょうどよく雨が降り、まさに民謡「田原坂」であった。正しき「義」とは何だろうかという問いが今日も頭を占めている。（稲村 隆）



コラム「我孫子から」について

志賀直哉用紙

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語

フラグヒサア



倍

皆さんは、桜の代表格・染井吉野をどう思っているだろうか。春らしい美しさにうっとりする人もいれば、毛虫の多さにうんざりする人もいるだろう。ちなみに筆者は前者である。小さい頃から親しんできた染井吉野には、やはり他の花にはない独特の愛着がある。小学生で初めて読んだミステリー小説のキーパーソンの名前も、確か染井吉野であった。

では楚人冠はどうだったかというところ、安いが良く育ち良く花をつけるため、自宅の庭には多くの染井吉野を植えていた。しかし、染井吉野にあまり良い感情を抱いてはいなかったようだ。毛虫が多いなどという理由故ではない。楚人冠は、他の桜よりも平凡な染井吉野の姿が気に入らなかったのだ。「名花が手に入ると、平凡な染井吉野が鼻について、薄情な話だが、大分切り倒した」と『湖畔吟』の「桜」でも述べている。

しかし、つむじ曲がりの楚人冠のことだ。口では嫌いだと言いつつも、本当は染井吉野を憎からず思っていたのではないかと、筆者は睨んでいる。『続々湖畔吟』『染井吉野』にて、楚人冠は再度「私は桜を愛するが、染井吉野というものは余り好かない」と述べている。だがこの随筆で楚人冠は、我孫子の村人たちが楚人冠宅に咲く桜をみて春を楽しんでいる事実についても「私が遠くの家から出て観たり、近くの田で働いている村人に愛でられたりしているのは、この伐り残りの染井吉野である。私がさまざまに好かずとも、村人に好かれるなら、それでもいい。自ら楽しめずとも、人に楽しませるなら、花を植えた本願は足りる。」と言及している。随筆では染井吉野を伐らないことについて村人を理由にしているが、そもそも、大正十三年から昭和十一年まで十二年続いた『湖畔吟』の最後の随筆の題名を「染井吉野」にしている時点で、楚人冠の染井吉野への思い入れが察せられよう。好きな子に対して意地悪をしてしまう、小学生のようにもみえる。

楚人冠が植えた桜は数が激減し、現在では記念館にて何本かを確認できる程度になっている。『湖畔吟』を読みながら、生き残った染井吉野でお花見をすれば、当時の村人の気分を味わえるだろうか。

(武藤真奈)

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。



我孫子通信

文人の郷だより

令和6年度夏号

通 第 十 信 六



辻説法

館長のつぶやき



第17回 女中さんのこと

▶女中さんという言葉聞いて何を思い浮かべるだろうか？大半の方が大きなお屋敷で働いている、お手伝いの妙齢の女性を思い浮かべるのではないだろうか。

▶歴史的に言えば、古代から貴族や領主の屋敷で働く女性は存在した。召使として下働きをする「下女」がそうだが、「労働者」として契約し対価をもらう「女中」が本格的に登場するのは江戸時代になってからであろう。

▶江戸幕府が人身売買を禁止した結果、「^{ねん き ぼう こう}年季奉公」として主と契約を結んで住み込みで働く人が現れる。総じて「奉公人」と呼ぶが、家事全般に従事する女性が「女中」である。江戸時代はまた、貨幣経済が急速に拡大した時代でもあった。「^{くちいれ}口入」と呼ぶ人材紹介業が盛行し、武家や町人を相手に、紹介手数料を取ってあっせんしていた。

▶家電などない時代である。料理、掃除、洗濯、縫物などは全て人頼みで、特に女性の担う役割は家の内外で多かった。奥方だけでは到底無理で、女中を上手く使うことが必要だった。一方、同じ女中でも「行儀見習い」として上流の武家や商家で働く女性もいた。「大奥女中」などはその典型で、良い結婚相手に巡り合う戦略でもあった。

▶時は移ろい、明治時代を迎える。表面上身分制度は無くなったものの、社会の在り方はそうそう簡単には変わらない。それだけではなく、急速に西洋化が日々の暮らしに取り入れられる中で、家事を担う女性の負担が重くなっていく。

▶例えば、それまでは食後に銘々の食器を米のとぎ汁でゆすぎ「箱膳」に納めれば良かったが、明治以降の洋食の普及によって多数の食器が必要となり、油汚れは洗剤で洗い流さなくてはならなくなった。また、これまでの藍染の着物はたびたび洗うものではなかったが、明治以降の洋装の普及に伴い、白いシャツを洗濯板（西洋のウォッシュボードを改良して明治に発明されたもの）で毎日洗う必要が生じた。文明開化が進むほどに、合わせ鏡のように家事を手伝う女中さんの存在が重要になっていくのだ。何とも皮肉である。

▶志賀直哉の『流行感冒』には我孫子の主人公（志賀自身か）の家で働く「^{いし}石」と「きみ」という二人の若

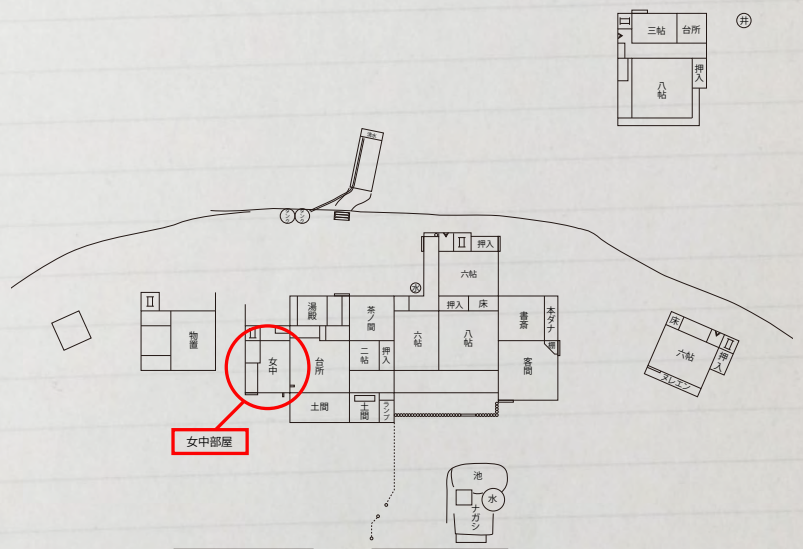
い女中が描かれる。石が手紙の文字が読めないので学校の先生に代読してもらった描写から、尋常小学校をそこそこに人材紹介業の「元右衛門」の紹介で女中奉公に来たことが分かる。

▶主人公の家での彼女たちの役割は、料理の手伝い、洗濯、町への使い（買い物）、子守りなどである。居室は台所脇の3畳間だ（図参照）。女中部屋としては標準な広さである。「石」は娘の左枝子から「いいや」（「石や」という呼びかけの幼児語）と呼ばれて親しまれている。志賀の評伝によると、志賀は女中に対して「○○や」と呼びかけたようで、志賀の娘がまねして女性の客人に対して「○○や」と呼ぶと、「きちんと○○さんと呼びなさい」とたしなめたという。このことから、女中はあくまでも使用人であり、家族とともに住みながらも他人であった。

▶しかし、主人公は気づく。「石」は「村芝居を見に行きたいから見に行く」「流行感冒に罹った主人が困るので、助ける」というシンプルな思考をする人であり、憎めない存在なのだ。流行感冒で献身的な世話をされた主人公は、親の勧めから急に嫁ぐことになった「石」の幸せを心から祈る形で小説は終わる。

▶ややもすると、女中に代表される一般庶民を軽く見ている節がないわけではない。先輩作家の夏目漱石は『吾輩は猫である』で女中の「おさん」を余り頭の良くない、俗物に描く。何せ身分社会である。学習院や東京帝国大学に集う上流階級と庶民とは全く違う存在なのだ。だからこそ、家庭にいる「異分子」である女中との出会いが新鮮であり、心を動かされることによって「物語」が生まれたのだろう。志賀は若いころ、女中と結婚しようとして父に反対され上手くいかなかったのだが、その結果が『和解』『暗夜行路』執筆につながったのだ。

▶昭和30年代以降、女中は急速にいなくなる。家電の普及に伴う省力化、女性の社会進出、住宅事情の変化、保育環境の改善など理由はさまざまであるが、通いの「家政婦」に名称が変わり、現在は介護を中心としたホームヘルパーなどに変わり、日本人だけでなく、外国人も加わっている。これからはロボットが家政婦の代わりとなるのだろうか。そこに心を動かす作家もまたAIだったりして（笑）。



志賀直哉が書いた我孫子の家の間取り図をトレースしたもの

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

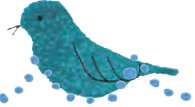
●先日、鎌倉へ遊びに行くと、冷えたキュウリを売っているお店に列ができていました。懐かしい気分になれるのでしょうか。それとも初めて見る光景なのでしょうか。青い空に緑のキュウリは「映える」のかもしれませんが●「野菜」というお題はなかなか難しいと思いましたが、多様な切り口でそれぞれの「野菜」を紹介いただきました●今年の夏も暑いようです。体を冷やす夏野菜を食べて、体調管理をしようと思います。みなさまもご自愛ください。（K）



テーマは「野菜」

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



野菜といえば、武者小路実篤である。画賛といい、言葉とともに野菜の絵を描いているのが印象的である。武者小路は次のような詩（「無車詩集」より）を残している。

野菜の画に

こんなものをかいて何になる
そう言う人があるかも知れない
しかしかくのが楽しく
見るのが楽しい人があるから仕方がない。
自然から与えられた
人間の食べ物、
人間の喜び、
私はそれを尊敬する。
(後略)

自然を愛し、人を愛す。白樺派の精神を理解するには、武者小路作品に触れてみるのを勧めます。今年から「暗夜行路」の旅を始めることとなった。理由は時が来たら開陳していく予定だ。今までゆかりの地を旅していたが、改めて暗夜行路をテーマに回ることとなった。再訪する場所もあるだろうが、最終目標は鳥取伯耆大山である。現在山登りの練習中である。六月は高尾山、七月は伊勢原大山、八月は筑波山。限界への挑戦により、今年の梅雨は調子よく乗り切っている。
(稲村 隆)



コラム「我孫子から」について
志賀直哉用紙

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語



フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

野菜の中でも特に人気のあるものとして、とうもろこしが挙げられるだろう。筆者の家でもこのくらいの時期になると、家族が実に美味しそうに茹でたとうもろこしを食べている。そのまま豪快にかぶりつくこと、全ての歯間に皮が挟まるあの感覚が苦手なので、筆者がとうもろこしを口にすることは少ない。

楚人冠が暮らしていた時代の我孫子でも、時期になるととうもろこしが良く採れた。当時の我孫子では、「成熟し切って、一粒一粒ちぎりと取って食わなければならぬような堅い」とうもろこしが好まれた（『続湖畔吟』所収「物の味」）。楚人冠は現代の我々世間一般と同様に、若く柔らかいとうもろこしを食べるのが好みだったため、いくら愛する我孫子に住む村人たちの意見とはいえ、とうもろこしを食べる時期の好みは相いれなかったようである。

そんなある日、楚人冠は村人に、地元で採れたとうもろこしを食堂で出しても客に失礼にならないかと相談を受けた（『続々湖畔吟』所収「とうもろこし」）。当時の我孫子では、村でいくらでも採れる野菜や魚を出して客から料金を取るのは忍びないため、他所から取り寄せた食材を提供するのが良しとされていたからだ。楚人冠としては失礼どころか、特に東京から来た客は我孫子の地のものを食べた方が喜ぶだろうと常々思っていたため、「必ず金は取る方がよろしい」と忠告をしつつ提供をすすめた。結果はもちろん大成功、客は皆とうもろこしを喜んで食べたそうだった。ただ、流石の楚人冠でも根本的な考えを変えるのは難しかったようである。店主が客からとうもろこしの料金を取ることはなかった。その後の楚人冠の話だと、あまりに美味しくもつと食べたかったが、代金を取ってくれないため大量に食べるのは憚^{はば}られ、おかわりを遠慮した客までいたらしい。店側はとうもろこしによる一切の収入がなく、客側は気を使って満足に腹を満たせない、誰も得をしない状況になったわけである。遠慮の塊のような扱いを受けたとうもろこしの心中は如何ほどだったであろうか。

（武藤 真奈）



我孫子通信

文人の郷だより

令和6年度秋号

通 第 十 七 信



辻説法

館長のつぶやき



第18回 「襖」の話

▶志賀直哉の小説に『襖』という短編がある。明治44（1911）年に『白樺』第二巻第十号で発表された、あまり一般には知られていない小説だが、ミステリーっぽさもあって興味深い話だ。概要はこうだ。

▶私と友達が温泉宿の床でタバコをふかしながら友達の思い出話に耳を傾ける。友人一家が、かつて箱根芦之湯の紀伊国屋という旅館に避暑のため滞在した。ハイシーズンのため、祖父・祖母・友人・妹・子守りの五人が三階の十畳ひと間に泊まることになった。隣の十畳にも東京京橋の弁護士夫婦とその母、そして娘と子守りの五人が泊っている。双方を隔てているのは「襖一枚」であった。

▶そのうち隣家の子守り娘の「鈴」（十六歳くらい）と知り合うようになった友人は、その子守りが気になりはじめる。「好き」なのではなく、当時ファンだった歌舞伎役者の丑之助に似ていたから会いたくなったという（失礼!）。「今の菊五郎が丑之助と云っていた時分だから」ということと言えば、六代目尾上菊五郎、つまり今の七代目菊五郎の祖父（八代目菊五郎と女優寺島しのぶの曾祖父）に当たり、後に立役から女形までこなす名役者となるのだが、友人はその当時「声がわりのしていた丑之助が可愛いので一番好きだった」のだそう。二代目丑之助と名乗っていたのは明治24～33（1891～1900）年の間なので、この小説のおおよその時代が分かる。歌舞伎役者を入れ込んでくるなんて、さすが歌舞伎通の志賀先生（笑）。

▶そのうち、友人は鈴がどこからか自分を見つめている、というような意識を持つようになる。ある夜、ランプを消した暗闇の中で友人が目覚めると、部屋の襖が「すーっと開く」。そしてしばらくすると「すーっと閉まる」。だれが、どうしてそんなことをしたのかわからないが、友人は鈴の仕業ではないか？鈴は僕に恋したのではないかと満更でもなく思う。しかし隣の家族は、夜中に友人が襖を開け閉めしている、と一方的に判断し、宿を去る。それとともに友人を巡る淡い恋も終わる、という流れである。

▶日本家屋は「田」の字型に部屋がレイアウトされており、襖を外すと大広間になる構造で、『襖』で描かれた十畳二間もいざとなれば宴会場となるような部屋だったのかもしれない。三階にある、というのも、眺望を意識したものとして、宴会場が置かれる場合が多い。

▶襖一枚で隔てる構造は「プライバシー」が尊重される明治後期以降、次第になくなる。大正13年に竣工

した杉村楚人冠記念館の母屋の和室に見られるように、壁や押し入れによって隔てられる構造に変化していくのだ。同様に、「中廊下」と呼ばれる通路が普及し、家族の動線と来客や使用人の動線が分けられるようになったのもこの頃である（図1）。

▶日本人には「見立て」という考え方があって、「襖」や「^{びょうぶ}屏風」（図2）「^{ついたて}衝立」「^{らんま}欄間」は壁と同じで、それで仕切ることにより別空間になる、というお約束事がある。「これから先は見ないでください」「入らないでください」というもので、実質は「すーっと開く」程度のものであるから多分に精神的なものと考えてよい。『襖』の隣の家族が感じたのは、実際に入ってこられるということもさりながら、「お約束事を破った」という気持ち悪さだと考えられる。

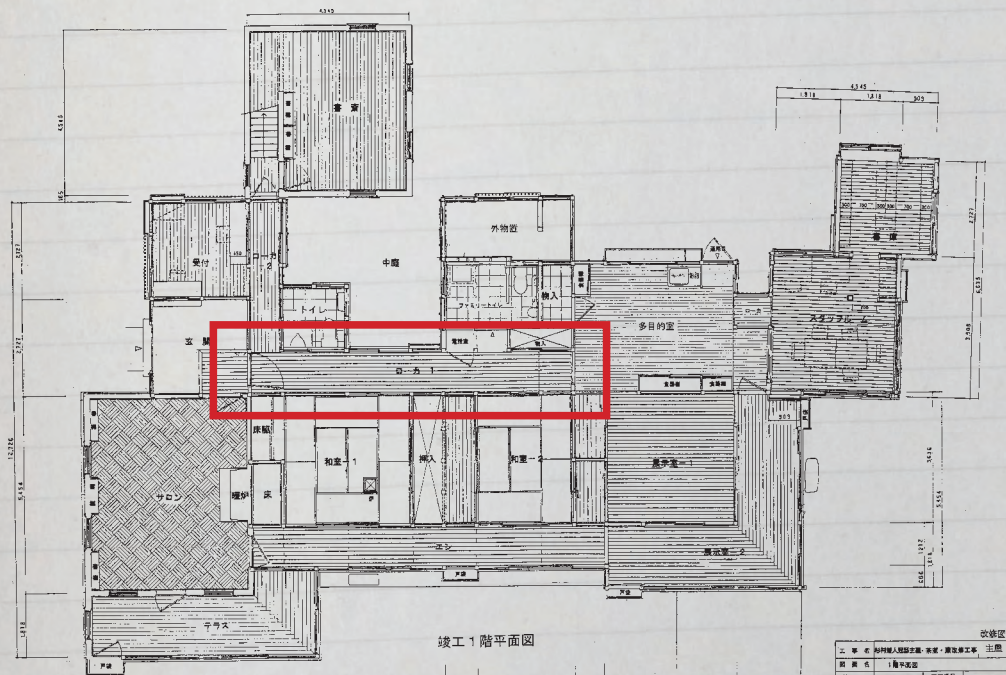


図2 屏風（イメージ）
屏風は旧井上家住宅所蔵
嘉永年間のもの

▶志賀たちが暮らしていた明治時代は、そういったお約束事を廃して

いく時代であり、ある意味「白樺派」もその先陣を切っていくわけだが、物語を作る作家としては、人の息遣いを感じにくい時代になったなあ、と感じたかもしれない。

▶箱根芦之湯の「紀伊国屋」は「きのくにや旅館」として現在も営業している。また、『襖』は『志賀直哉全集』の第一巻にあるので、温泉とともに小説に浸ってみるのはいかがでしょうか。



杉村楚人冠記念館の平面図、南側の居住スペースと北側の水回りを分ける中廊下（赤い四角部分）があるのがわかる

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

●秋号遅くなり申し訳ありませんでした。やっとみなさまにお届けできました●この夏は、ボランティア制度を立ち上げ、歴史に興味がある新しい仲間を迎えることができました。ガイドさんについては今後、各施設で活躍されると思いますので、ご来館の際はぜひ、お声がけください●あわせて資料整理のボランティアさんもいらっしやいます●地道な作業で表には出ませんが、文字を読み、我孫子の歴史を紐解く大切な作業をお手伝いいただいています（K）



テーマは「文字について」

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



文字は古代から使われており、事象やモノの形が起源である。文字は日常を刻み、現在に生きる私たちは過去からのメッセージとして読み解いている。読み解くために必要なのが「崩し字」を読む力である。

日本の書は大きく分けて、唐様と和様に分けられ、和様は中国東晋の王羲之の書を根底に平安時代中期に三蹟によって日本人らしい書流がつけられたものである。ちょうど、大河ドラマに三蹟の一人、藤原行成が出ており、彼の書が時の天皇に愛されていた様子が描かれていた。その和様の書は鎌倉時代、室町時代と時代を経るごとに流派が分かれ細分化されていった。その中に和様の初めである藤原行成を祖とする世尊寺流を学んだ尊円法親王が青蓮院流を南北朝時代（一四世紀頃）に確立した。この書が近世になると幕府によって公文書に使われることによって「御家流」として、明治時代に入るまで日本の書を中心となっていたのである。この御家流があるからこそ、近世文書はルールに沿って崩されていくため、読みやすい文書になっている（個人の癖は除く）。しかし、明治時代になると、個人が文字を書く機会が増えることで、近世以前の細分化のような、「自己流」が進み、そうになると、なかなか現代の私たちを悩ます「崩し字」が生まれてくるのである。

白樺の文人たちの書を見ると、文字を仕事にする人たちなので、鉛筆やペン書きで書きなれた細かい文字が並んでいる。これが、柳の叔父嘉納治五郎になると墨やペンで大きな字が並んでいる。この文字が書きなれすぎて自由奔放なところが悩ましい。嘉納の書については、市図書館のデジタルアーカイブで紹介しているので、ぜひご覧いただきたい（左下のQRコードから読み込んでください）。

また、白樺派の時代は近代化が進んだことから江戸時代に使われていた「御家流」を飛び越えて、文字を新たに創出しようとしていた。柳は明治以降の時代を体現する字体が誕生していないことに対して、「私はもう一度「字」に生命を吹き込みたい」と宣言し、雑誌『工藝』では、書や拓本や文字の特集が組まれ、近年でも令和三年一月号で「民藝運動の文字」を特集している。柳は拓本や陶芸作品の中に書かれている書を「工藝的な文字」と呼んでいた。このことから、日常的に使う文字が、私たちにとって一番身近な柳の提唱する「民藝」なのかも…と今回のコラムを書いて思ったところである。

（代理：今野 澄玲）



▲我孫子市民図書館
郷土資料
デジタルアーカイブページ

志賀直哉用紙

コラム「我孫子から」について

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。

白馬城放語

杉村楚人冠記念館
学芸員コラム



フラグヒサア



倍

日本語というのは複雑なもので、一つの漢字で複数の読み方があったり、その読み方によって微妙に意味が違ったりする。小説を読んでも、作者が想定している「読み」と、こちらが読み取った「読み」が違う場合も多々あるであろう。この作者と読者における「読み」の違いは、作品を楽しむ上で大きな問題にはならないとはいえ、その作品を深く知ろうとすればするほど、作品理解の妨げになることもあるのではなからうか。日本語とは、以上のような問題が起こり得る、良く言えば繊細な言語、悪く言えば紛らわしい言語である。

東京朝日新聞社の新聞記者として記事を書くだけでなく、コラムや随筆、紀行文と多くの文章を発表していた楚人冠にとって、こういった文字に関する問題は決して他人事ではなかった。では楚人冠はどのように対処していたのか、正解は『楚人冠全集』等に収録されている彼の作品を読めば分かる。楚人冠は、自らが書いた文章の漢字全てにふりがなをふっているのである。楚人冠は「ふりがな廃止の問題―活字と新聞紙とより観て―」（『重篇』、『楚人冠全集』十七巻所収）において、ふりがなの重要性を語っている。一つは、漢字を読めない読者にも文章を理解してもらえらるること、もう一つは、作者が伝えたい細かなニュアンスまでも、ふりがなによって伝えられることである。身近な言葉で言えば、「日本」を「ニホン」と読むか「ニッポン」と読むかだけでも、その文章の印象は大きく変わる。その印象づけの手助けをするのが、ふりがなであるというわけだ。楚人冠はふりがなについて、「その初こそ漢字の読めない者の為に出来たものだが、それが次第にそれとはかけ離れた別種の意味で保存されて来た」と述べている。

ふりがなのない作品を読む際に、作者の性格等を鑑みて読みを想定するのも、読書の楽しみの一つと言えるようか。勉強不足故にそもそも漢字の読みが分からない…という事態はなるべく避けたいものである。

（武藤 真奈）

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。



我孫子通信

文人の郷だより

令和6年度冬号

通 第 十 八 信



辻説法

館長のつぶやき



第19回 沼端の住まい

▶志賀直哉の小説に『濠端の住まい』という短文がある。志賀は尾道での生活を切り上げ、東京に戻った後、大正3（1914）年5月から約100日にわたって島根県松江城の濠に臨む一軒家を借りて独り暮らしをした。そこで体験した出来事をもとに大正14（1925）年に執筆したものだ。

▶独り暮らし、といっても親友の里見弴が松江市内に暮らしていたし、白樺派の友人たちが入れ代わり立ち代わり訪れていたのだから、孤独とは無縁だったのかもしれない。暮らしは「出来るだけ質素にと心掛けた」とあるが、朝食は紅茶にパンと上等なバタにラディッシの酢漬け、だそうだから、好みの物は譲れない志賀先生である（笑）。小説にはそこまで書いていないが、昭和23（1948）年に思い出話を取りまとめた『稲村雑談』の「松江」に記録されている。

▶『濠端の住まい』の概要はこうだ。濠端の小さな一軒家を借りて住んでいる主人公は人づきあいに神経を使う都会の暮らしに疲れ、自然との対話を優先させ、人付き合いは後回しと決めた。その中で事件が起きる。隣の若い大工夫婦が飼っていた、めん鶏が野良猫に襲われ殺害される。殺された鶏は大工夫婦の食卓に上るのだが、野良猫は、大工が仕掛けた「おとし」（ワナ）に掛かり、翌朝には濠に沈めて殺される運命となった。主人公は死を予感して夜中に騒ぐ猫の声を耳にして、大工、野良猫それぞれの思いに心を動かされ何もできない。朝になって気が付くと猫は葬られ、おとしに使われた箱はすでに乾き始めたところだった。

▶この小説は『城の崎にて』に通じる生と死の対比、昆虫や動物の描写が短い文章に表されるが、私が気に入っているのは次の描写だ。「そして、書きものを始める。明け方、疲れ切って床へ入る。濠では静かな夜明けを我もの顔に鯉や鮒が跳いで居る。丁度産卵期で、岸でそれらは盛に跳ね騒いだ。私はその水音を聴きながら眠りに落ちて行く」という表現は実体験でないと描けない描写で、まるで映画かアニメのワンシーンのようだ。

▶先日、松江に行った。学生の際は遺跡巡りが主だったので、志賀や小泉八雲の足跡を巡る旅としては恥ずかしながら初めてだ。「濠端の住まい」は再開発で既になく、あいにくの雨に濡れながら、松江城の濠堀端にしばし佇んでみた。この住まいには後年、「志賀ファン」の芥川龍之介も住んだという。雨音だけが響く

この場に立って思った。「濠端から住まいの景色は尾道や我孫子、赤城山に似ている」と…。

▶途方もなく広い海辺には、後年熱海大洞台に住んだ。しかし若いころに住んだ尾道、赤城山、我孫子は狭い水面に対岸の景色が映り込み、水と一体化した景色が楽しめるのだ。自然と人との融合、と言っは言い過ぎかもしれないが、気が向けば自然界に浸れる、という気安さがあったのではないだろうか。

▶我孫子は「退屈だった」と後年志賀は語っているが、どこよりも小説を書いたのは我孫子においてである。志賀は我孫子で自然と人とを対比し向き合える、「沼端の住まい」に出会ったのだ。



写真上 左 住まい跡の説明板（松江にて）
写真下 左 赤城大沼（『焚火』の碑のそば）

右 城の濠（左手奥に小泉八雲記念館）
右 瀧前不動下渡船場（昭和初期の手賀沼の様子）

耳をすませば、志賀直哉が聞いた水辺の音がいまでも聞こえる…かもしれない

コラム「辻説法」について

辻説法とは、人が集まる町角（＝辻）で、仏の教えを広めるため演説・講話をすることです。同時に辻は、世俗の権力の及ばない場所と考えられる故に漂泊し、自由な人々が集まり、芸術や文化が生まれた所でもあります。そこで、苗字が同じであるのも何かの縁、我孫子の歴史や文化についておしゃべりします。

六号雑感（編集後記）

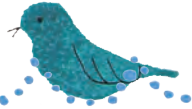
●とざい、と～ざい●大河ドラマの影響で江戸っぽくはじめました●今年の冬は風が強い日が多い気がします。強い風で冷たいからか、旧井上家住宅にある梅はやっと咲いてきました。逆に、杉村楚人冠記念館の梅は今が見頃です。都市と田園地帯の差を我孫子市内でも感じます●3月は毎年恒例の高校生が席主のお茶会が我孫子市の東西で開かれます●江戸時代と戦前に建てられた建物の違いを体験できます●暖くなる季節。ぜひお出かけください。(K)



テーマは「お酒の話」

我孫子から

白樺文学館
楽藝人による小噺



仲間が集まれば、お酒も進み、文芸談義も盛り上がる。白樺派の面々も然りと思ひ、このお題にしたものの、蓋を開けると柳宗悦、志賀直哉、武者小路実篤、揃ってお酒に関する記述が少ない。武者小路に関していえば、お酒は飲まなかったよう。よくよく考えると、武者小路は新しき村を考えた人物。自ら育てた作物で生活していたわけで、お酒に興味はなかったようだ。あわせて、志賀も明治三四年から明治四十年まで約七年間、内村鑑三の門下生となり、キリスト教に接し、内村の思想の影響を受けたためか、お酒とは縁遠い生活を送っていたようだ。さて、困ったので、白樺派つながりで我孫子とお酒に縁がある人物を探すと、嘉納治五郎に行きついた。嘉納治五郎は、教育者であり、講道館の創始者でもある。私は以前講道館に行ったとき、柔道家のなかにはいまも治五郎を崇拜している人が少なくないと感じた。治五郎は我孫子が別荘地となる初期の段階、明治四四年に天神山に別荘を設けた。そして、治五郎は夫と死別した姪の柳直枝子すえこに自分の側に住んだらどうかと、自身の別荘の隣に家を建てることを勧めたのである。直枝子は家を購入したものの間もなく再婚が決まり、買ったばかりの家が空き家になってしまった。そこで、結婚したばかりの柳宗悦夫妻が住むことになり、その後、我孫子に白樺派の文人たちが集うきっかけとなった。では、その治五郎とお酒の縁を紹介すると、彼の生家は菊正宗酒造・白鶴酒造を経営した嘉納三家とは分家筋にあたり、父治郎作は灘（兵庫県）一帯にある五つの酒造地、いわゆる灘なだ五郷ごごうの清酒を江戸に送る樽廻船業に従事した。そして勝海舟かつかいしゅうに推挙され、新政府に出仕したことで嘉納も東京に住むこととなった。

ここで、私は「嘉納治五郎は教育者である」と一番に紹介した理由を二つ述べたい。一つ、灘中学校は灘五郷で酒造業を営む、嘉納治郎右衛門（菊正宗）、嘉納治兵衛（白鶴）、山邑太左衛門（櫻正宗）、によって設立された。出資はこの三家であったが、学校の理念を作ったのは治五郎である。その他にも日本女子大学の創立などにも携わっている。次に、我孫子尋常高等小学校との交流である。治五郎はただ余暇を楽しむために我孫子に来ていたわけではなく、学校の先生や地域とも交流していたことが、いまも我孫子第一小学校に残る治五郎の書からもうかがえる。当時は楚人冠や地域の人々と夜に座談会を開いていた。そのときは、お酒が進んだのかもしれない。

（代理：今野 澄玲）

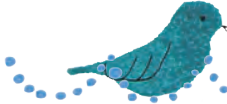
志賀直哉用紙

コラム「我孫子から」について

柳宗悦が雑誌『白樺』に掲載した、我孫子について書いた「我孫子から」のタイトルに由来しています。



白馬城放語



フラグヒサア



倍

コラム「白馬城放語」について
杉村楚人冠が我孫子に別荘を構えた時に執筆した随筆
に由来しています。

男性をその魅力で破滅に導く女性をフランスでは「ファム・ファタル (Femme fatale)」と呼ぶ。舞の褒美として洗礼者ヨハネの首を求めた、ヘロデ王の娘サロメ等がこれにあたる。筆者にとつてのファム・ファタルは酒である。魅力的な姿で目の前に現われた酒を一口飲んだら最後、歯止めがきかずに翌日は布団の上の住人となり、財布は破滅の道を辿る。

楚人冠も酒を嗜んでおり、我孫子にて朝から酒を飲む喜びを詩に詠んでいる。「朝ざけの歌」という名のこの詩は、「たぎれる湯の中にゆあみせること立てるささがめ。とりいだせば湯気もやもと酌めば猪口に金色ただよう」と、まるで湯浴みする女性を盗み見ているような怪しくも甘美な、だが朝特有の爽やかな雰囲気をも漂う作品となっている。この詩をみて「水戸黄門」に登場するかげろうお銀の入浴シーンを思い出したのは、筆者だけではないはずである。

楚人冠の友人であり、日本舞踊家として活躍した藤蔭静枝は「朝ざけの歌」に大変感銘を受け、この詩に踊りをつけたいと書簡で語っている。「此詩がおどれたらほんとうに羽が生じて虚空をとんぼの様に眼玉くるくるかけまわれる様になるかもかもしれません」と、まるで詩に酔っているかのように、夢見心地な様子で綴っている。本書簡における藤蔭の文章の書きぶりは「すばらしい詩ですわね」「一杯やりたいね」等、普段の彼女の書簡にはあまり見られない語尾の「ー」が多用されている。泥酔者の話口調と酷似しているため、彼女が本当に酒に酔いながらこの手紙をしたためていた可能性は大いにある。藤蔭は姓が杉村である楚人冠に対し、親しみを込めて「スーさん」と呼んでいた。そんな藤蔭が我孫子で暮らしたい旨を相談した際、楚人冠は自身の敷地内に東屋（現存せず）を建てて藤蔭を住まわせる等、援助を行なっており、二人の親密な関係がうかがわれる。本書簡のくつろいだ雰囲気も、二人の間にある信頼の表われであろう。

酒は飲むとも飲まるるな、どんなに飲酒をして心地が良くとも、「とんぼの様に眼玉くるくるかけまわらないように注意が必要である。これからも明るく楽しく程よく、酒を嗜んでいきたい。」(武藤 真奈)